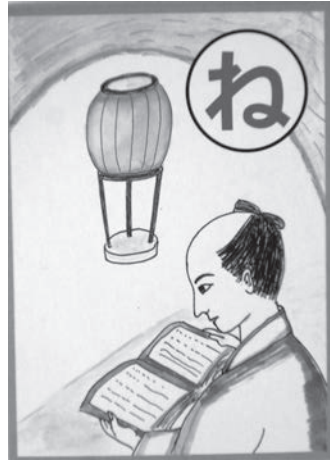


**ね** 寝静まる 夜更けを待って  
学問し

武士が強い力を持つていた江戸時代初期は、学問より武芸に励むことを大事にしたので、学問は弱いものとするのだと思われていた。学問も大事なことだと考えておられた藤樹先生は、毎夜、みんなが寝静まってから遅くまで勉強された。



**な** 何遍も 「おきなもんどう」  
「翁問答」  
練り直し

藤樹先生は「翁問答」と言う本を書こうとして、なんべんも読み返しては、書き換えて、自分が納得するまで書き直しを続けられた。



**ら** 落馬して 思い新たに  
技みがく

ある時、藤樹先生は小林という馬術に優れた武士と馬のことについて話をしていて「馬くらはいは練習しなくても乗れる」「いや、馬を扱うには練習が必要だ」という議論になった。先生が乗ってみると、思うように馬は動かず、ついには振り落とされてしまった。その時、先生は自分の考えが間違いであったことを謝られた。



**む** 村人は 教えを受け継ぎ  
祭りごと

「近江聖人」と仰がれるほどの藤樹先生の優れた教えや行いを、後の世へいつまでも伝え、称え、そして鑑としようと、小川村の人々を中心に、先生をしのび、祀る行事が今日に至るまで続けられている。(書院鏡開きと講書始め藤樹忌祭典、藤樹神社例祭、常省先生祭典など)



**う** 馬の鞍 はずせば飛脚の  
忘れ物

川原市(高島市新旭町安井川の川原市)の馬方又左衛門は、その日のお客(加賀の飛脚)が馬の鞍に忘れた大金二百両を、二十六キロも離れた榎の宿(大津市和邇)まで届けに行った。その時、客からお礼にと差し出されたお金を受け取らずに帰った。この正直な馬方は、藤樹先生の教えを受けていた一人であった。



**の** 後の世に 近江聖人と  
称えられ

良知をみがき、身を修め、行いを正しくすることに努めれば、人は誰でも聖人になれると悟られた藤樹先生は、それを目指してその通り、生き続けられたので、後の世の人々は、先生を「近江聖人」と称えるようになった。



藤樹かるた制作委員会委員

足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・  
北川暢子・清川貞治・高谷美智子・  
山本義雄 (五十音順)

(次号に続きます)